

能力や可能性を最大限に伸ばす自立活動 ～小・中学校の実践例を通して～

栃教協教研推進委員会 特別支援教育部
那須町立黒田原小学校 教諭 大泉 尚美
大田原市立若草中学校 教諭 江口 彰人

1 はじめに

現在、特別支援教育において、児童生徒が個々の困難に対して、主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養うために各学校で「自立活動」の授業を実践している。自立活動は特別支援教育にとって重要といわれている授業であり、学習内容は児童生徒の実態に合わせて変えていくべきであるとされている。そのため、一人一人に即した学習内容にするために毎時間内容を検討していく必要がある。子供たちの実態を把握したり、その子にどのような力を身に付けさせたいかを考えたりして授業を計画するため、特別支援教育に携わる教員は授業の組み立てに苦労していることが多い。そこで、当部会では、各学校でどのような自立活動が行われているかアンケートを実施した。回答を区分ごとに分類し、栃教協のホームページに掲載している。

今回は教研の特別支援部会の小学校と中学校で行った実践を紹介し、先生方の授業の立案の一助になってほしいという思いで提案をすることとした。

2 提案内容

【中学校の実践例】

○「SNS の使い方・メディアリテラシー」

ねらい 区分③人間関係の形成 区分⑥コミュニケーション

授業の流れ

- ・ SNS の意味と種類、特徴を知る
- ・ 具体的なネットトラブルの事例を知る
- ・ メディアリテラシーに気を付けながら、コミュニケーションの図り方 を考える
- ・ 振り返りとまとめをする

○「理想の自分ってどんな人？」

ねらい 区分②心理的な安定 区分③人間関係の形成

授業の流れ

- ・ 友達の良さについての言葉カードを作成する
- ・ 作ったカードから自分に合うカードを選ぶ
- ・ 友達の話し合いを通して、カードを取捨選択していく
- ・ 自分の良さに気づき、理想の自分に近づくために必要な力を考える
- ・ 今後の具体的な自分の行動に見通しを立てる

【小学校の実践例】

○「どうしたらできるかな？」

ねらい 区分②心理的な安定 区分⑤身体の動き

活動内容

1. 指先を使った活動
2. 数字と数量、数唱の基礎となる活動
3. ひもを使った活動
4. 文字の基礎となる活動
5. 自分やものの名前を覚える活動

3 成果と課題

成果

- ・児童生徒の課題を保護者と共有することができた
- ・教材を開発する費用の節約（100円ショップなどの活用）

課題

- ・家庭との継続的な協力体制の確立
- ・児童生徒の適切な実態把握の必要性

「明日も行きたい」と思える教室をつくる「教師観」とは

佐野市立西中学校 梅山 昌美

1. 問題と目的

近年「学校に行かない」という選択肢をもつ子どもや保護者が増え続けている。（児童生徒問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査より）文部科学省も様々なリーフレット等を作成し、早急な対応が必要であるとしているが、様々な資料や文献から「受容感」を感じることができれば、子どもが「明日も行きたい」と思える教室になると想像することができた。では、我々教師は、どうしたら「受容感を感じられる教室」を作ることができるのだろうかと考えた時に「教師観」に着目し、研究したいと考えた。また、その材料として著者が関わってきた学校の子どもたちに行った取組みによるエピソードと「教師観」を関連させ考察していきたいと考えた。また、この結果や研究の成果を学校現場で広め、自ら実践していくことで不登校や不適応、問題行動と呼ばれる行動の減少・改善や子どもたちの本当の学びと幸せにつなげることを目的とした。

2. 研究方法

- (1) 文献や論文、文部科学省をはじめとする教育機関が示す指針や研修を通して考えたことをまとめる。
- (2) 教職員へのアンケートやインタビューから、「教師観」や「明日も行きたい教室」についてまとめ、考察する。対象は著者の勤務校や内地留学を経験された（大学院を含む）教職員、宇都宮大学主催のサマーセミナーに参加された教職員の合計54名。アンケートは、Google フォームや質問紙を活用。インタビューは、5名の教職員に同様の質問をし、回答を得た。
- (3) 著者が学校で関わった3名の子どもたちに行った取組みによるエピソードをまとめ、考察する。

3. 結果と考察

(1) インクルーシブ教育の現状に関する資料から
文部科学省はインクルーシブ教育を目指すにあたり、まず「共生社会の実現」を示している。つまり、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会の実現だ。その基盤となるのが、「インクルーシブ教育システム」で、このシステムは、「同じ場で共に学ぶことを追求する」とともに、「多様な学びの場を用意しておくことが必要である」とし、このような形で特別支援教育を推進していくことは、「全ての子どもにとっても、良い効果をもたらすことができるもの」と考えられるとしている。さらに、「令和の日本型学校教育」では、特別支援教育を担う教師の専門性向上が重要として、障害の特性等に関する理解や基礎的な知識、個に応じた分かりやすい指導の工夫等の検討を示している。加えて、広域での研修や人事交流の仕組みの構築、教員養成段階における内容の厳選やコアカリキュラムの作成などが重要であるとしている。では「何をを目指すのか」と考えた時に参考にしたのが研修先の職員から、特別支援学校がなくなるという情報が流れたときに、真っ先に反対したのは、そこに通う子の保護者だったとうかがった。それは、大切な子どもが本当に必要とし

ている学びを与えてもらえるのだろうか、新しい環境で安心して過ごせるのだろうかと不安になったことが理由だという。そのようなことから、それぞれ学ぶ場所や学び方は違ってよいと感じた。つまり、その場には友達がいる「その子が誰からも大切にされていると実感できる教室」と「もっと知りたい、やってみたいと思えるような様々な活動のある教室」になるために、学校が工夫や手立てを行う。それこそが、「インクルーシブ教育」で「明日も行きたい教室」ではないかと著者は考えた。

(2) 「教師観」について

「教師という仕事において、あなたの志や目指す教師像」については、アンケートの回答記述から項目を抜き出し、まとめていくと教師観を「共に」「寄り添う」「教師として」の3つに分類することができた。その割合は「教師として」の教師観を獲得している教師が1番多いことが分かる。しかし、教師になった初めの頃と現在との変化をみると「教師として」が減り、「寄り添う」が大きく増えていることが分かった。さらに、「そう思ったエピソードやきっかけ」についての回答から思いや傾向を分析し、ア、イ、ウ、に分けて、結果と考察をすることができた。エ、については、栃木県教育委員会の特別支援教育振興計画による特別支援教育に示されたものを教師観と関連させることとした。

ア、「共に」の教師観からの結果と考察 「児童と目線を合わせて一緒に考えていきたい」という記述から、子どもと共に過ごしながら学び、自分も成長していきたいという気持ちを重視していることが分かる。また、「教師として」や「児童生徒として」というのではなく、子どもと自分を一人の「人」として捉えた時に、その言葉を選択するにいたったのではないかと想像することができた。

イ、「寄り添う」の教師観からの結果と考察 「より人権に関して細かい配慮が必要とされる生徒が増え、弱い立場の生徒に寄り添える教師になりたいと思った」という記述から、「子どもは何らかの困り感を抱えている」と捉え、関わっていることが分かる。また、失敗や反省を語る記述はないため、子どもや保護者と良い関係を築くことができていると想像することができた。

ウ、「教師として」の教師観からの結果と考察 「多様な子どもたちの学び方に対応できる高い専門性をもつ教師」や「授業が楽しいと思ってもらえる教師」という記述から、教師としての指導技術の向上を目指していることが分かる。また、子どもとの関わりの中で「教師である自分が、どうすべきか」を意識していることを想像することができた。さらに、「変化のない人」についても分析すると、学生時代の経験を語り、先生から認められた経験を活かしたり現在も尊敬している先生を目指したりしているということも分かった。

(3) 「明日も行きたい教室」について

アンケートにおいて「子どもが明日も行きたいと思う教室は、どのような教室だと思いますか」の問いに対する回

答から、共通するキーワードをまとめ、分類することができた。共通して1番多いのは「安心・安全」で、記述内容から学級にはこれらが確保されていることが最も重要であるとしていることが分かる。2番目に多いのは「居場所」である。教師が考えた居場所とは、「自分自身が必要とされている場所」という記述が多い。では、子どもたちにとって「居場所」とは、広い意味で捉えることができるが、「受容感」「自己有用感」が大きく関わってくると考えることができた。3番目に多いのは「友達」と「楽しい」である。ここで、研究していくにあたり、意見を参考にしたゼミの学生は、「学校に行きたいと思って行っていたわけではない。でも、友達がいたから楽しかった。」と回答していたことを思い出した。すなわち、子どもたちは「友達がいるから学校が楽しい」と感じているということだ。ここで著者は、教師と子どもたちの間には、認識にズレが生じているのではないかと考えた。さらに、子どもにはまだ「安心・安全」という言葉が存在しないのかもしれないと想像することができた。近年「心理的安全性の確保」は学校以外でも必要不可欠とされ、教室では一人ひとりが自分の考えや気持ちを誰に対しても安心して発言できる状態であるとしているが、子どもたちにとって「そこに何があれば居場所と感じ、安心できる教室と認識するのか」については、実際にアンケートしていきたい。

（4）著者が関わってきた学校の子どものエピソード

これまでの研究と著者がもつ「教育観」により行った取組のエピソードを関連させると、「もっている力を活かす」や「つなげる」ということに焦点を当てながらア、イ、ウのようにまとめ、考察することができた。

ア、Iさん、その子に適した支援や指導を吟味して行うという取組によるエピソード Iさんは人の役に立ちたいという思える力がある。良好な友人関係を保つために、自分の「気持ちを伝える」方法や「相手の気持ちを想像する」という引き出しを増やすことを目的とし、SSTのワークシートを取り入れ、表情から相手の考えや様子を想像する練習をした。するとある時、「先生。〇〇さんは、今、悲しいのかな？」と聞いてきた。そこで、「そうだね。どうしたの？と優しく声をかけてあげてみては？」と伝えると、Iさんはその子に近寄り、声をかける様子が見られた。そういった引き出しを増やすことで、結果として友達とつなげることができたと考える。

イ、Sさん、その子の意見を聞き入れたり、受け入れたりする取り組みによるエピソード

登校ができるようになり、授業を教室で受けることができるようになった。こうして、良い方向に進んでいるという状況でも、「頑張りすぎていないか」や「どのような気持ちで過ごしているのか」と心配をしていた。しかし、そのままの思いを伝えるときっと、「大丈夫です」という返答が予想されたので、プラスの感情や次の日につながるような感情を引き出したいと考えていた。さらに、Sさんは計画的に物事を考えられる力をもっているため、「明日も行こうかな」や「明日も行きたいな」と思えるような会話になるよう心掛けた。そこで行ったことは、Sさんが下校する前に「今日の振り返り」として、①今日の出来事について②今日、自分なりに頑張ったことについて③次回の目標ややってみたいことについてという項目を立てて話をするのである。すると、初めは「友達が話をしてくれるから嬉しい。」と語り、次第に「自分から話しかけたい。」

と意欲をもつようになった。さらに、「授業が分かるようになりたい」から「数学の授業が楽しいと感じてきた。」などの学習に対する意欲の変化も見られたのだ。しかし、それだけにとどまらず、学習の話題が出た際には必ず「他の教科は？」と問い返しを行うようにしていた。すると、「あの教科でグループを作る方法がくじだと少し不安である。」というので、教科担任とSさんをつなげた。すると、教科担任が活動方法を自己選択できるようにしてくれた。その後、「はじめは知らない人と話すのは緊張したけど、一緒に活動していくと、打ち解けられてきたのが分かった」と言ったのだ。そのような様子を振り返ると「不安を伝えることができた」ことから教科担任とつながり、「教科担任が自分のことを知っているという安心感」や「学習方法を自己選択できる」という状況となった。しかし振り返ると、そのどれかが欠けていたら、また欠席が増えていったかもしれないと想像することができた。

ウ、Kさん、仲間・職員との関係づくりを支援する取組によるエピソード 給食の時間でデザートが余ると、決まってじゃんけんを行っていた。「私 VS ほしい子」だが、その中には「じゃんけんがしたいだけ」という子もいた。K君もその1人で、じゃんけんを楽しんでいた。勝ったり、負けたりすることで表情豊かにしている。余るデザートがないと自分のデザートを差し出す時もあった。私はこのやりとりをK君のつながりを感じられる、大切なやりとりとしていた。そして、ある日、K君が勝ち残った。「おお！K君が勝ちだね。はい。デザート取りに来て！」と言うと「おれ、いらない」と言うので、これはチャンス！と感じ「じゃあほしい人はK君とじゃんけんね」と言うと、少し照れながら前にでてきてじゃんけんをしたのである。あの時の嬉しそうな恥ずかしそうな顔を、私は一生忘れないだろう。K君は偏食もあったため、給食の時間があまり好きではない様子だった。いつも「給食を食べないから給食費を払う必要はない。」などの話をしていた。しかし、じゃんけんイベントがあったことによって、給食がK君にとって楽しみな時間に変換され、なにより級友とつながることができ、とてもよかったと感じている。

4. 総合考察と今後の課題

多くの教師が「教師観」を変化させているが、一人ひとりを「個」として捉えることで、その子が「すでもっている力」を活かせる見通しをもつことができるのではないかと感じ、「子ども主体」の考えとなるような変化をさせていきたい。また、「明日も行きたいと思える教室」に必要な要素とは全ての教師観に「安心・安全」と「居場所」が共通していたが、「共に」の教師観には、「友達」の存在が必要だと示されたため、この研究では、「共に」の教師観が有効であると考えられた。

それらを踏まえて、「その子が幸せになるため方法や選択肢を、共に学び、共に見つけ、共に進めていく」という考えを、現場において広めていきたい。さらに、重要なキーワードとして導き出した、「子どもがすでもっている力を活かす」や「つなげる」という視点については、それらを新たな課題として掲げ、「困った子」は「困っている子」と捉える中で、「何に困っているのか」を共に考えられたらよいと感じている。